



若 者

Good day, Aussie !!

千葉訓司*

昭和63年1月末から平成元年3月末まで、約1年2カ月に渡り、オーストラリアのメルボルン大学化学工学科 (Dept. of Chemical Eng. University of Melbourne, Parkville, VIC 3052, AUSTRALIA) で研究を行ってきました。この機会に、メルボルン大学を紹介すると共にオーストラリアで感じたことを書いてみたいと思います。

メルボルンとメルボルン大学

ビクトリア州の州都メルボルンは、人口約280万人。シドニーに次いで連邦第二の大都会である。オーストラリア連邦が誕生してから、1901年にキャンベラに首都が移されるまでの間、連邦政府の所在地であった。

メルボルンはまた、オーストラリアの各都市の中でも、一番ヨーロッパ的な雰囲気漂う街であり、特にビクトリア王朝時代の趣が色濃く残っている。近代的な高層ビルに混じって、19世紀のゴシック様式の重厚な建物がいくつも見られ、また、美しいアイアンレースのあるテラスハウスも当時の面影そのままに残されている。古い建物が人々に愛されて、生き生きと街の中に生きている感じだ。

メルボルン大学は、1855年ビクトリア州初の大学として創設され、3名の教授と16名の学生が参加して開校式が行われた。この大学のモットーは、“Postera Crescam Laude” (I shall grow in the esteem of future generations) である。今日、メルボルン大学は総合大学へと発展し、多くの卒業生が科学、技術、政治、芸術などの方面で幅広く活躍している。学生数は約16000名で、現在、学部学生の定員数は変わら

ないが、大学院生あるいは研究者の数は増加し続けている。

大学はメルボルン市の北部約1.5kmに位置し、Swanston St. と Grattan St. に面している。大学には Swanston St. を走るトラムと呼ばれる市電に乗れば簡単に着ける。敷地面積は約19ヘクタールで、キャンパス内には1850年代の建物も数多く残されており、1960年代の建物と趣のあるコントラストをなしている。

なお、オーストラリアでは新学期は2月から始まり、小学校から大学まで4学期制である。夏休みを除き学期と学期の間には2週間程度の休みがある。

メルボルン大学での研究

化学工学科では、Prof. David V. Boger (元々アメリカ人でオーストラリアへ来て約20年になる。趣味はfishingである。)の下で非ニュートン流体力学、特に“急絞り流路内での繊維懸濁液の流れ”について研究を行った。

ニュートン流体(水、油など)にアスペクト比の大きい繊維を少量(例えば、0.1vol%以下)でも混合すると急絞り流路内での流れ状態がニュートン流体の場合と大きく異なることが最近観察されており、私の研究の目的は、この現象を解明することにある。アスペクト比の大きい繊維は巨大分子の最も簡単なモデルであると見なせるので、繊維懸濁液は高分子液体の簡単なモデルであると考えることが出来る。従って、流れている間の繊維の形状並びに配列の変化と流れ模様の変化を関連づけることが出来れば、将来、高分子溶液・融液の複雑な形状の流路内における流れのメカニズム(分子形状の変化との関連)を解明するのに役立つと考えられる。また、実用面では、得られた結果はFRPの流動成形装置の設計並びに適切な成形条件を決め

*千葉訓司 (Kungi CHIBA), 大阪大学工学部産業機械工学科, 助手, 工学博士, 高分子工学

る上で有用であろう。

メルボルン大学化学工学科の教育スタッフは、3名の教授と約10名の講師 (senior と junior lecturer を合わせて) で構成されており、我々の大学に比べて小規模な組織で教育、運営がなされている。また、私が一緒に研究を行った Prof. Boger の研究グループは、research fellow と呼ばれる研究者 (主に Ph. D candidate) と master course の学生 (研究に専念し、授業は受けない) で構成され、レオロジーに関する研究を行っている。なお、日本の大学と異なり、学部学生は研究には加わらないので、各研究者が自分一人で全てのことを行わなければならない。しかし、研究に興味を持った学生が時折実験室を訪ねて来るがあった。その際には各研究者が研究内容を分かりやすく親切に説明しており、非常に興味深かった (私の短い経験では、本学でこのような学生に会ったことがない。残念である!)。Prof. Boger のグループは、毎週金曜日の午後教授の部屋でミーティングを行い、研究の進行状況、直面している問題点並びに連絡事項が報告される。とにかく、研究に関してはもちろん一般的な事項についても活発に議論するのが特徴である。

さて、化学工学科全体の行事としては、毎週木曜日12:00~1:00の間、各方面から講師を招いて seminar が開催される。もちろん聴講者は学内のみならず学外の人も多く、学生もまた参加している。その他、学科全体がこじんまりまとまっているので色々なアクティビティも盛んに行われる。例えば、クリスマスの昼食会、誕生日の昼食会、平日の午後のゴルフ大会とパーベキューなど、大学内にあっても生活をエンジョイしながら研究を進めており、生活を犠牲にしてまで研究を押し進めようとする風潮は全く見られない。

全ての基本は人間らしい生活、生活を楽しむというのがオーストラリア人の信念であろう。

Good day と Have a nice weekend

オーストラリア人自身、オーストラリアを、また、オーストラリア人を “Aussie” と呼びま

す。オーストラリアに1年余り滞在した経験から、オーストラリア人の気質を最も的確に表す言葉は何かと聞かれたら、表題の “Good day” (グ・ダイと発音する) と “Have a nice weekend.” の二つの言葉を挙げます。“Good day” は、“Good morning” から “Good evening” までの全ての一般的挨拶に用いることができます。これに対し、金曜日の夕方、職場を出る時必ず仲間にする挨拶が “Have a nice weekend.” であり、月曜日の朝、職場で初めて顔を会わせた時の挨拶が “Did you enjoy your weekend?” である。これらの挨拶言葉からも分かるように、仕事はもちろんのこと、個人の生活をエンジョイすることが Aussieにとって非常に大事なことである。日本人のように暇を持て余すなんて、彼らには考えられないことで、その人に合った生活の楽しみ方を非常によく知っている。海や湖でクルーザーに乗る人もいれば、庭の草花の手入れを楽しむ人もいる。

それと、彼らは “good” という単語を好み、頻繁に使う。我々日本人の感覚からすると、goodには思えない状況に対しても、この単語を使うことがある。正に、Aussieは常にgoodな状況を目指すhappyな人間である。

Aussieはhappyであるばかりでなく、誰に対しても親切です。特に、体の不自由な人、お年寄りが生活しやすいように色々な設備が整っている。例えば、車椅子の人のために、ほとんど全ての駅でスロープあるいはエレベーターが設けられ、プラットホームでは駅員が乗降を必ず助けてくれる。ですから、体の不自由な人でも一人で健常者と同じように行動出来る。あるいは、出来るように近くにいる人が必ず助けるのがオーストラリアの社会である。以上、オーストラリアについて感じたことの一部を書いてみました。

最後に、読者の皆様の中で、2、3週間の休日ごとれたら、是非、オーストラリアへ行かれることをお勧めします。happyでkindなAussieと知り合いになり、広大な自然を満喫すれば、必ず、精神をリフレッシュすることが出来ます。